

釣れ釣れなるままに

2013年思い出の釣行記 PART. 6

政泊平盤ホッケ 寿都漁港ガレイ 鹿島釣狂

☆釣行日	平成25年4月27(土)
☆入釣場所	政泊平盤・寿都漁港
☆天候	曇り 北西強風
☆釣果	ホッケ 40cm以下 87匹
	真ガレイ 30cm以下 6枚
	砂ガレイ 26cm 1枚

政泊平盤でホッケ爆釣

4月27日から29日まで続く3連休はどこへ釣りに行こうか。第1回大会で親鱗会の小西氏から教わった藻岩の出岬でアブラコやソイをターゲットにしようか。それとも瀬棚港や千走港でクロガシラの大物を狙おうか。菅原隆氏が大漁したという大平川河口平盤での遠投で真ガレイ、近投で根モノという手もあるぞ。

女房に釣行を告げると、「29日は名寄の娘のところに孫を迎えに行くと言ってあったでしょ」とあえなく2日間の日程になってしまった。前日の26日は、午後勤務だったので午前中に女房の買い物に付き合い、釣りエサや食料を買い揃える。女房と一緒にだと彼女が抱える買い物籠に忍び込ませるだけで自分の小遣いを使わなくて済むのだ。ついでに車中泊で楽しむ酒やビールも紛れ込ませておいた。

釣り場を色々悩んだ挙句、まずは手ごろな政泊平盤でホッケを爆釣してから考えましょうと、27日午前4時に岩見沢を出発して一路寿都弁慶岬に向けて高速を走った。それにしても天気が気になる。予報では27日は雨のち曇りで波も1.5m~2mで推移してい

くようだ。風は強く吹くようである。

7時半頃、寿都湾沿いを走っていると、湾尻にある風車は止まったままで、全くの無風状態だ。弁慶岬を交わすと先日の「つりしん」で好釣果が伝えられていたこともあり、政泊平盤の駐車帯は自家用車で埋まっていた。遠目で見てもホッケは釣れているようである。用意した沢山の道具立ての中からウキ釣りだけを準備して坂を下っていくと、雨上がりで濡れていたこともあり足元が滑って胴長が泥だらけになってしまった。

平盤の中間辺りに波が上がっているところがあり、それを避けて釣り人がまばらなこともあって、そこを釣り場と設定して午前8時にウキ釣りを開始した。左隣の御仁はウキ釣りサビキで一度に2本、3本とホッケを上げている。そして、波があるので1回、1回、波の来ない後ろに下がって魚をクーラーに詰め込んでいる。右隣りは本格的なウキ釣りなのだが、これも後ろのほうに置いたフラシに1本、1本、魚を運んでいる。活性が良いためエサをとられてスカの状況はなく、エサつけのために後ろに戻る心配はないのだが、手返しはすこぶる悪い。波があがって撒き餌を置く場所もないので、棚は底のほうで食っているようだ。私の仕掛けはほぼフカセ釣りで鉛を軽くしてウキを小さめにしているので、底にエサが届くまでの時間はかかるが底の方にエサが届いたと思われる時点で必ず食ってきた。

私の右隣りの隙間に後からやってきた釣り人が入った。足下にコマセを入れたバツカンを置いたがすぐに上がって来た波に流されて海水がドッポリと入った。彼は状況をすばやく察知し、オキアミのエサ箱を胸に、釣り上げたホッケの入れる網を腰のベルトに付け、更にコマセを入れた小さなビニルバケツもぶら下げた。そして、打ち上げられる波を気にすることもなく手返しよくホッケを釣り上げている。そして20本ほどがフラシに収まったところで、後ろに置いた別のフラシに入れ替えた。なにせホッケはウヨウヨと居るのである。



私の右隣に入った釣り人は、腰にコマセバケツ、網袋をぶら下げて手返しよくホッケを釣り上げていた。

みんな順調に釣れ続けている。朝から入っていた右隣の御仁も、自分は竿を片付けて、仲間にしきりに帰ろうと促すも、その仲間は釣り続けている。もう十分釣ったし、それ以上釣っても後始末に困るだけだと訴えているのだがその手を休めようとはしない。その気持ちは十分に分かる。とにかくホッケが釣れるので楽しいのだ。左隣のウキ釣りサビキの御仁は、奥さんが迎えにきて押問答をしていたがあきらめて竿を仕舞った。そして、後ろの方で奥さんと一緒にホッケを捌いており、その周辺にはカモメやカラスが群がっていた。朝方入った人は順次引き上げて入れ替わりに釣り人が入ったが、少しずつその人数は減っていった。

私も、もう少し楽しみたい気持ちがするが昼が近づいてきたのを潮時と考えて引き上げることにした。そして、皆さんと同じようにホッケの頭と尻尾を外して車に用意した大き目のクーラーに詰め込んだ。



本日の釣果。散らばっているホッケはフラシに入れるのが面倒で放り投げておいたもの。この平盤にも時折波が上がってホッケは自然放流となった。

寿都赤灯台の真ガレイ

お昼は寿都漁港脇にある中華料理店「昇竜」でタンタンメンを注文した。前回の第1回大会で利用したときに食べた味が忘れられなかったのだ。白味噌仕立てのコクのある辛味は口の中でフワッととろけ、それでいて喉越しはさっぱりとして絶品なのだ。ファイターズの結果を知ろうと新聞を手にしたが、スポーツ欄がない。スポーツ新聞も手にしたが日ハムの記事が載っているはずの1面がない。店主が相当な日ハムファンで記事を切り抜きしているのだろうと思われた。

料金を払おうと棚にふと目をやると釣遊会の名前の入った見慣れた帽子があった。前野会長の帽子だ。先日の大会で利用したときに忘れてしまったのだ。店員が気付いてバスに駆けつけようとした時にはすでにバスが出発した後だったというのだ。帽子を貰い受けてから、イソメのエサが心もとないので近くに釣具店があるかを尋ねたが、ないということだった。(釣り道具なら近くのホームセンター「イエローグローブ」にあるかもしれないが・・・。)

そうとうな風が吹いており、岩場には波が打ち上げて釣りにはならないだろうと夜釣りに備えていた岩場でのソイ釣りは断念した。

14時半、寿都漁港を偵察した。港内に釣り人は誰もいない。去年の第2回大会で嵐氏

がアカハラとクロガシラの大物を釣り上げて優勝し、更に20数枚ものクロガシラを手にしたところには、漁船が係留されロープが張りめぐらされて、ずいぶんと釣りずらそうなところだった。昨年の釣果は5月半ばのことで外海が大荒れの時だったのでクロガシラが港内に溜まっていたことが伺えた。

車が1台やってきた。釣り人であろうか？こちらの様子を伺っているようにも思える。私も寿都港の様子を聞いてみたいのだが、近づけない。そのうちにその場を立ち去っていった。漁港の地図を確認する為に車に戻り、航空写真を捜すが寿都港が出ていない。(家に帰ってから他の航空写真で確認すると港の様子がどうも違っている。新港の入り口に当たる旧防波堤は取り壊されて、新港側から赤灯台に続く新たな防波堤が築かれていた。インターネットで地図検索するとやはり違っていた。)

寿都漁港は赤灯台のある先端がよいとされているがうる覚えで、赤灯台は見えず、先端にはどの様に行くのか見当が付かずに躊躇していると、外防波堤に向かう釣り人が見えた。防波堤付け根に付いたハシゴを登ってから、何段にもなっている外防波堤を上り下りしながら先端の方へと歩いていく。どの様なルートを通るのかを見守っていると先端付近でいなくなった。どこに消えてしまったのだろうか。先端の向こう側に階段でも付いているのだろうか。とにかく先端までのルートがおよそ分かったので、自分も向かうことにした。

外防波堤付け根に駐車して今度は投げ釣りの用具を整えていると、そこに釣り人らしき車がやってきた。車から降りてきたので、様子を聞く。その方は、「朝方に防波堤先端で釣りをしたが、クロガシラ混ざりで真ガレイ40枚程の釣果だった。朝方は釣り人が二人だけで、風も穏やかで、5時に満潮を迎える絶好の潮だった」というのだ。続けて、「午前6時頃から20分ほどかけてタコ漁の舟が岸壁近くを通って出漁していくため、道糸を引っ掛けないように気をつけなければならなかったが、それ以外は快適な釣りだった。そして、だんだん風が強くなり、タコ漁の舟も戻って来るようになったので、竿を仕舞ったが、風が弱まればまた釣りをしたいので様子を見ているところだ。港の中にもクロガシラが溜まる場所があるがまだまだ時期は早いだろう。コナゴ漁が始まれば夕方出漁していく舟もあるだろうが、現在は始まっていない。赤灯台付近には子供連れを含めて現在7人が乗っているはずだ。テトラが岸壁を埋め尽くしているところもあるが、場所さえ問わなければ、スペースはまだまだ空いているだろう」と教えてくれた。

防波堤の入り口にある梯子を上ると漁港全体が見渡せて、港内から見ると先端だと思っていたところはまだ途中であり、その先に赤灯台が見えた。防波堤の上を歩いている途中、1人の若者が荷物を持たずに帰ってきた。どうでしたかと尋ねたが、何も答えてくれなかった。

赤灯台に向かう防波堤は一段低くなっており、そこに背丈ほどの梯子が掛けられていた。灯台付近には6名がいて、帰った若者を入れると確かに7名で、先の御仁の観察眼の正確さには驚かされた。

6人の内の2人は子どもだ。大人4人とも、外海側に向けて竿を出していた。更にその

外側には3台の三脚が並べられていた。先ほど出くわした若者が朝方に向けて設置していたということで、私は、先端から少し下がった舟道側のスペースに三脚を設置した。そして、三脚にぶら下げるバケツの水を汲もうとバケツをロープに括り付けて垂らした。しかし、海面からの高さがある上に風が強く吹いて思うように水が入ってくれない。先端から一段下がった防波堤に下りると海面に続く階段があったのでそこで海水を汲んだ。そして、万が一50cm台のクロガシラが竿を揺らした時もここで取り込もうと思った。

先客から「釣りに来た人ですか」と尋ねられた。リュックで判断したということだ。釣りの状況を聞くと、子連れの釣り人は午後2時頃に入って、型のよい真ガレイを5枚ほど釣ったと教えてくれた。あとの3人連れはその後に入ったがまだ釣果がないということだった。

隣がホッケを釣った。私はホッケをもう十分釣ったので釣れてほしくない。カレイがほしいのだ。子連れが真ガレイを釣った。魚の引きを楽しむようにゆっくりとリールを巻いており、よく見るとこれも型のよい真ガレイがダブルで付いている。

灯台の後ろで竿を出していた御仁が40cmほどもあるクロガシラを釣った。3人とも遠投派で立派な道具立てをそろえている。ロケット駕籠付き天秤仕掛けはともかく、2本バリ仕掛けは、かなりの飛距離が出ている。私もカレイ仕掛けにロケット籠を付けて遠投する。丁度風は後ろから吹いており思いのほか飛距離が出た。

子連れの子供は小学3年生と1年生で、よくここまで来たものだと思う。子どもにはもちろんライフジャケットを着せてはいるが、ブーイなどを持ち出して岸壁の縁で竿を出しているのを見ると、風で吹き飛ばされて落ちはしないだろうか心配になる。対岸を見ると今朝方回っていなかった風車が勢いよく回っていた。お父さんの方もいよいよ心配になったのか、更に型のよい真ガレイを1枚追加したところで子どもを引き連れて帰っていった。

私の隣で竿を出していた御仁のエサを見せてもらった。タツパに塩エラコが1本1本丁寧に並べられている。冷凍してもそのままの形で残っており、千切れないという。そして、その1本1本をこれもまたタツパから丁寧に取り出して、三脚にセットしてあるエサ入れにきれいに並べている。仲間は彼の人柄がよく出ているのだと話してくれた。

私の塩エラコといえば先日の苦小牧港の釣りで残ったものに塩エビ粉をまぶしておいたものだ。これは丁度よい具合になっていたのでも千切れることもなく、海から上がってくる時には生イソメの状態になっているのだが、去年の使い残しに塩をしておいたものは、ハリに付けるはなから千切れて役に立たない。

いよいよ風がひどくなり3人連れも帰っていった。一人、灯台の影に隠れて竿先を眺めていると小気味よいアタリが鮮明に出た。手のひら台の真ガレイだった。それからアタリが続いて、7枚を手にした。まだまだ釣れそうな感じがしたが、一人取り残されてみると心細くなってきた。途中の低い防波堤に波は上がっていないのだが、時折防波堤の外に分厚く積まれたテトラに打ちつけた波飛沫が降り注いでいるのが見える。もう限界だろうと、

午後6時、寿都町に響き渡るサイレンを合図にして竿を畳むことにした。



30cm以下の真ガレイ6、砂ガレイ1

漁港内で竿を出している釣り人がいた。チカ釣りだろうかと思ってみると、テーラー仕掛けにウキを付けてヤリイカを狙っているという。昨日の日中、同じ場所で型のよいヤリイカを7杯釣り上げたので柳の下のドジョウを狙って来てみたが、今日は港の中に入っている様子は見られないので引き上げるといって片付け出した。

風は勢いを増している様でもあり、夜釣りを決行する元気もなく、引き上げることにして、湯別の湯によって疲れを癒すことにした。湯別の湯の駐車場と一緒に入ってきたワゴン車を見ると釣り道具がびっしりと積まれていた。風呂場で挨拶を交わすと、蒲原平盤で釣りをしたが友達と2人でホッケ3匹の貧果だったという。ウキ釣りはやらないのかと聞くと、投げ釣りに拘りがあるらしい。そして延々と2人で楽しそうに今日の釣行を振り返っていた。

今回は一人の気軽さで計画も行き当たりばったりで、自由に行動を決めることが出来たが、1人の寂しさも味わった。今回は、車中泊をと考えて、ビールも日本酒もつまみもどっさり用意していったが結局、1日だけの釣りで寝酒を飲む必要はなかった。

釣り上げた沢山のホッケは、次の日、女房が行き先をきれいに裁いていた。私は、カレ

イを捌き、ホッケは開きにして乾して、残りはフライ用にと1食分を捌いた。